
仮面ライダーW外伝

“ The Long Goodbye ”

ウーシャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW外伝

“The Long Goodbye”

【Nコード】

N7613P

【作者名】

ウーシャン

【あらすじ】

風都の闇に引き裂かれた二人の探偵。

英雄が消えた風の街で、かつてない規模の二つの超常犯罪が発生する。

ガイアメモリを『人類進化の鍵』と称し、ドーパントのために戦う仮面ライダーランブル。存在するはずのない『天使』のメモリを所持する、連続殺人犯ツクモ。

今幕を開ける、鳴海探偵事務所異端にして最悪の事件簿。

ブローグ

その男は、昔の僕によく似た虚ろな目をしていた。

「……っ!!」

ダブルの中にいた精神が弾き飛ばされ、自分の体に戻ってくる。

意識を取り戻したフィリップが最初に目にしたのは、自分を取り囲むように燃え盛る炎と、満身創痍で倒れている相棒の姿だった。

「……翔太郎!!」

駆け寄ろうとするフィリップに、炎の向こう側から男の声が届く。

「……俺の攻撃が当たる直前に」

「!？」

「左はドライバーを無理矢理外した。攻撃を喰らう前に変身解除することで、君にダメージが及ばないようにしたんだろう。あの僅かな間に大した判断力だ。だが」

炎の中から現れた人影が、倒れたままの翔太郎を指差す。

「だがそれは……俺の攻撃を生身の体で受けたことを意味する」

その言葉を肯定するかのように、うつぶせに倒れた翔太郎を中心に赤黒い血だまりが広がりつつあった。

「死んではない。まあ……これから死ぬかもしれないが。どうする？ 園咲来人。君が素直についてくるなら、これ以上は何もしない」

「……………」

フィリップは答えず、スタッグフォンを開いてリボルギャリーを呼び出した。

（リボルギャリーとアキちゃんが到着するのは、どんなに早くても15分……ここから最寄りの病院までが、約10分……かなりきわどいが、翔太郎の生命力を信じるしかない）

ふと視線を落とすと、翔太郎がうなされるように何かを訴えていた。ひゅう、ひゅうという苦しげな呼吸の音しか聴こえないが、フィリップには彼が何を言いたいのか、手に取るように分かった。

……逃げろ、フィリップ……

嘆息しつつも、苦笑がこぼれる。

この男はいつもこうだ。

仲間のためなら、自分の命を差し出すことなど少しもためらわない。

「後のことは任せたまえ。彼は、僕が止める」

「……君はもう少し賢い方だと思ったんだが。見込み違いだったな」
皮肉げに告げる男に向き直り、力強く宣言する。

「君たちの思い通りにはさせない。もちろん、翔太郎も死なせない」
「君一人で何ができる？もうダブルに変身することもできないというのに」

言われずとも、承知の上だった。
とてもじゃないが、翔太郎は戦える状態にない。

いや、それ以前に。

「そうだね。僕たちのメモリは全て、君に奪われてしまった」
フィリップと対峙する男の足元には、6本のガイアメモリが転がっていた。

戦闘中に強奪された、『ヒート』・『メタル』・『ルナ』・『トリガー』……

唯一残っていた『サイクロン』と『ジョーカー』も、最後の攻撃を受けた直後に奪われてしまったらしい。

「でも、そんなことは関係ない。どんな手を使ってでも、僕は君を倒す」

「……左と同じく、自分の命を危険にさらすことになるぞ。パートナーと言っても、所詮は他人じゃないか。その男がどれほどのものだというんだ？」

「多分、君には理解できないさ」

眼前の男が放つプレッシャーを受けてなお、フィリップは不敵に笑ってみせた。

状況は絶望的、取れる手段も極めて少ない。

なのに、一体何が自分をここまで駆り立てるのか。

フィリップは目を閉じ、地球の本棚の中にある『Family』というタイトルの本を開いた。

中のページは無造作に破り取られ、自分にどんな家族がいたのか知ることができない。

しかし本の後半には、新しいページが追加されていた。

そこに記されているのは、予測不能な行動ばかりする所長と、ハイボイルドな相棒。

「相乗りを誘ったのは僕だ。僕が先に降りるわけにはいかない」

「……………」

男はしばらく黙ったままフィリップと向き合っていたが……やがて嘆息と共にかぶりを振った。

「仕方ないな。殺しはしないが……骨の2、3本は覚悟しろ」

言うが早いのか、恐るべき速さで男が迫る。

フィリップは振り向かないまま、意識のない翔太郎に語りかけた。

「僕は君を信じている。だから君も、僕を信じろ」

そう言い残し、フィリップも男に向かって駆け出した。

「来い！ファング！」

呼びかけに応じて、姿を隠していたファングメモリがフィリップの右手に飛び乗る。

「ダブル第7のメモリか！だが護衛用ガジェットごときで俺を止められると思うな！！」

「こいつで君を止められるとは思っていない」

フィリップは走りながらファングメモリを組み立て直し、ライブモードからメモリモードに移行させた。

「……君を止めるのは、あくまで僕だ」

《ファング！》

「！？」

牙の記憶を告げるガイアウイスパーが響く。

真意の読めないフィリップの行動に、男が僅かに動きを鈍らせた。

「さあ……！」

壮絶な覚悟と共に、

「お前の罪を、数えろ……！」

フィリップはファングメモリを自分の左腕に突き立てた。

仮面ライダーW外伝

“ T h e L o n g G o o d b y e ”

第1話 Wの不在／探偵は沈黙する

『さよならだけが人生だ』。

どこかの小説家が詠んだ詩の一文。

俺はこれを読んだ時、こいつはなんてネガティブな野郎だと呆れた。

相棒はそんな俺を見て、

「翔太郎。その詩は『人生は別ればかり』と言っているわけじゃないよ。これには『さよならだけが人生だから、今この出会い、時間を大切にしよう』という意味があるんだ」

と教えられた。

なるほど、そう解釈するなら悪くない言い回しだ。

今度誰かに使ってみよう。

そんなことをつぶやいていると、

「やめておきたまえ。君がその言葉を使っても、薄っぺらい印象しか与えないよ」

「逆に『何ネガティブなこと言ってんねん!』って、翔太郎くんがツッコまれちゃうかもね」

相棒どころか亜樹子にまで笑われた。

大きなお世話だ、ちくしょう。

いつかそういうセリフが似合う男になってやらあ。

笑う二人に啖呵を切って、俺はふてくされたようにそっぱを向いた。

……さよならだけが人生だ。

その言葉の意味を覚えてくれた相棒は、もついない。

「断る。あんたの依頼は受けられない。帰ってくれ」

鳴海探偵事務所の応接間。

テーブルを挟んで向かいに座っている女性に、翔太郎は冷たく言い放った。

「なん……で、ですか？お金なら用意があります。警察は『ただの家出』と、まともに取り合ってくれないんです！お願いします、息子を捜してください！もうここしか頼れる所はないんです！」

依頼人である三十代半ばの主婦は目に涙を浮かべながら懇願した。

翔太郎は一度天井を仰ぎ……大きく息を吐いてから、暗い瞳で依頼人と視線を合わせた。

「……あんたの息子がいなくなったのは十日前だったな。警察に届け出を出したのが昨日だ。で……その間あんたは何をしていた？」

「何っ、て、息子を捜してたに、決まってるじゃないですか！」

「嘘だな」

感情を一切表さない能面のような顔で、きっぱりと否定する。

「十日前、あなたは友人と温泉旅行の真っ最中だ。帰ってきたのは三日前。次男からの電話で、長男が失踪したのは旅行中すでに知っていたのにだ」

「なんつ、えっ……」

「その後もエステやら同窓会やら、色々と忙しかったらしいな？そんな奴が今さら『息子を探してください』だと？」

「……………」

静かだが有無を言わせぬ翔太郎の口調に、依頼人は何も言えずに口をぱくぱくさせていた。

「……私、が、この事務所のことを知ったのは、ほんの……一時間前のことなのに……どうしてそんなこと、知って……いつ、いつ調べたんですか？」

「あんたがウチに電話して、ここに来るまでの十分の間にだが。それがどうかしたのか」

そら恐ろしいことをさらりと述べて、翔太郎は立ち上がった。

「分かったらとっとと出てってくれ。それでも忙しいんだ」

背を向ける翔太郎に彼女は慌てて立ち上がり、

「おねっ、お願いします！確かに行動を起こすのは遅すぎましたが、息子の身を案じているのは本当なんです！どうか……」

「俺が一番気に入らないのは」

振り返らずに、女に告げる。

「この期に及んでまだ自分で捜そうとしない、その腐った根性だ。
『金なら用意がある』だと？まずはボロボロになるまで自分で捜せ。
分かったらさっさと帰れ」

「……っ」

それ以上は何も言わずに、依頼人は涙に顔を歪めたまま事務所から出ていった。

それを見届けると、翔太郎は深々と嘆息し……

一人になった事務所で、静かにコーヒーを淹れ始めた。

そこへ、

「変わったな、左。以前の君なら、それでも息子を探してやっтарうに」

入り口のドアから顔を覗かせたのは、真っ赤なジャケットを着込んだ馴染みの刑事だった。

「コソコソ盗み聞きたあ、いい趣味だな照井」

振り向きもせずに皮肉って、コーヒーカップに口をつける。

照井と呼ばれた男は特に気分を害した様子もなく、ずかずかと部屋に入ってきた。

「仕事中だったようだから、外で待たせてもらっただけだ。聴こえてくる声にまで責任は持てん」

「ふん」

不機嫌そうに鼻を鳴らす翔太郎に構わず、照井は棚から勝手にカップを出して自分にもコーヒーを注いだ。

「……もう半年になるんだな。この探偵事務所が、君一人になってから」

「その話はやめろ」

「思えば、君が変わったのもそれからか。ハーフボイルドはどこへ行ったんだ。相変わらずなのはコーヒーの味だけだな」

「くだらねえことを言いになわざわざ来たなら、今すぐ出ていけ」

コーヒーカップをデスクに置き、翔太郎はようやく照井と向き合った。

「君に指図される筋合いはないが……確かに、俺も無駄話をしに来たわけじゃない」

照井は胸ポケットから折りたたまれたメモ用紙を取り出し、翔太郎に差し出した。

怪訝そうな顔でそれを受け取り、メモ用紙を開く。

「……………！」

そこに書かれていた内容に、翔太郎の目がわずかに見開かれた。

「……………この情報は確かなのか？」

「ああ。ビルの監視カメラに映っていたのを、知り合いの警備員が知らせてくれた。俺も映像を確認したが、彼女に間違いない」

「……………亜樹子……………！！」

そこには、行方不明だった元所長・照井亜樹子の居場所が記されていた。

株式会社フウト・フード。

風都における外食産業シェアの六割を独占するその会社のことは、翔太郎も以前から知っていた。

しかし照井によると、フウト・フードは裏でガイアメモリ流通組織『ミュージアム』の非公式スポンサーとして、資金援助を行っているとのことだった。

「俺が調べた時は、こことミュージアムは無関係だったはずなんだから……」

「この会社がスポンサーとなったのは、つい先日のことだからな。どうも新しく社長に就任した影山という男、園咲琉兵衛が生前親しくしていた人物らしい」

「……………」

園咲、という名に翔太郎の表情がわずかに陰を増す。

「そもそも園咲家の死後、財団Xからも見放されて壊滅したはずのミュージアムが、なぜ今になって活動を再開し出したのか……左、君は何か掴んでいないのか」

「……さあな。だが一般企業に金出させてまで活動してんだ、どうせまた口クでもねえこと企んでんだろ」

不機嫌そうに吐き捨てる翔太郎。

二人は今、フウト・フードの本社ビルに来ていた。

一階のエントランスホールに入り、まっすぐ受付カウンターへと向かう。

「で、どうするつもりだ照井」

「ミュージアムと繋がっている決定的な証拠がない以上、あまり強引な手段は使えん。まずは警備室に行つて、例の監視カメラの映像

を君にも確認してもらおう。それから……ん？」

小声で話していた照井が、何かに気づいてフロアの一角を見やる。

翔太郎もそれにならって視線を巡らせると、青いスーツ姿の女性がこちらに向かって近づいてくるところだった。

「失礼ですが、照井竜様でいらっしゃいますね？」

「そうだが……あんたは？」

「お待ちしておりました。わたくし、弊社の社長秘書を勤めさせていただいております、桜井と申します」

名刺を差し出して薄く微笑む、桜井と名乗る女性。

が、照井はそれを無視して桜井に詰め寄った。

「待て、どういうことだ。俺は警備の人間には話を通しておいたが、秘書とアポイントを取った覚えはない」

「承知しております」

微笑みを絶やさぬまま名刺をしまい、彼女はうなづく。

「本日お越しになったのは、照井亜樹子さんの件……ということでしょうか？」

「……………！」

困惑ぎみだった照井の顔に、警戒の色が浮かぶ。

「実はそのことで、社長がぜひ直接お会いしたいと申し出ております」

「……全部お見通しというわけか」

睨みつける照井と笑みを浮かべる桜井の間に、ぴりぴりとした空気が漂い始める。

「いいじゃねえか、照井」

その空気に割り込むように、翔太郎が口を開いた。

「回りくどいのは好きじゃねえ。向こうさんがこうして招待してくれてんだ、コソコソする必要はもうないだろ」

「……ああ。やむを得ん」

「恐れ入ります。では、こちらへ。社長室は最上階にございますので」

桜井に案内されるままに、エレベーターに乗り込む。

少しずつ遠くなっていく眼下の景色を見やりながら、翔太郎は無言で現状確認をしていた。

（会社のトップ……しかも園咲琉兵衛と親しかった人物が接触してきたってこたあ、やっぱ亜樹子はミュージアムに拉致られてたわけか。照井が見たっていう監視カメラの映像……あれも俺たちを誘い

出すために、わざと情報を漏らした可能性もある）

隣りに立っている照井もまた、目を閉じたまま腕組みをして何か考え事をしている。

（敵の目的はなんだ。亜樹子エサに俺らをおびき出して、まとめて消そうってハラか？ いや、仮にここで俺らが死ねば、真っ先に疑われるのはこの会社だ。となると、奴らの狙いは……）

エレベーターが最上階に到着し、静まり返った廊下を突き進む。

ほどなくして、『社長室』と表記されたプレートの部屋までやってきた。

（……俺らに何かを要求する……亜樹子はそれを拒否させないための、人質ってどこか？）

二人の前に立つ桜井が、ドアを軽くノックする。

「桜井です。照井様と左様をお連れしました」

「ああ。入りなさい」

扉の向こうから返ってきたのは、深みのある男の声。

「では照井様、左様。こちらでございます」

ドアを開け中へ促す桜井の横を抜けて、翔太郎は部屋の中に足を進めた。

広々とした室内には至る所に絵画や壺が並んでおり、社長室というよりは美術館といった雰囲気醸し出している。

そして正面奥。

風都の景色が一望できる全面ガラス張りの窓際に、初老の男がこちらを向いて立っていた。

「はじめまして、照井警視に左探偵。フウト・フード社長の影山と申します。お会いできて光栄だ」

威厳に満ちた声で迎える影山に対し、照井は懷から素早く警察手帳を取り出し、相手に向かって手帳を開いて見せた。

「風都警察署・超常犯罪捜査課の照井だ。早速だが本題に入らせてもらう。現在行方不明になっている照井亜樹子について、何か話があるそうだな」

「まあまあ……まずは飲み物でもいいかがですか？美味しい紅茶でも淹れさせましょう」

「結構だ。話をそらすな」

「せっかちですね。ま……いいでしょう」

苦笑しつつ、翔太郎と照井がソファに座るのを待ってから影山も腰掛けた。

「さて。もうご存知かとは思いますが……私はミュージアムの協力者です。園咲さんには昔、とてもお世話になりましたね」

「ずいぶん簡単に認めるんだな」

「あなた方に隠したところで、いずれ分かることですから。とにかく、今はスポンサーという形で資金援助していますが、近いうちに我が社を利用した大規模なガイアメモリの実験を予定しています」

「なんだと……！？」

「そこで計画を円滑に進めるためにも、お二人にお願いがあるのですが」

影山は目を細め、威圧的な声で言い放つ。

「……今日限りでドーパントと敵対するのをやめ、ミュージアムの一員として協力していただきたい」

「……っ！ふざけてるのか」

照井の表情が険しくなる。

が、

「大真面目ですよ。私はあなた方を決して過小評価しません。むしろ認めているんですよ、その実力と実績を。失うのは少々惜しい」

まるで『ただ殺すだけならいつでも出来た』と言わんばかりに、余裕たっぷりの態度で彼は続けた。

「ちなみに、件の照井亜樹子さん……警視の奥様ですが、我々が丁重にもてなしています。ご聡明なあなたのことだ、これ以上はもう

言わなくてもお分かりになりますね？」

「っ……汚いマネを！」

照井が歯ぎしりして相手を睨みつけた、その時。

「お前らの考えはよく分かった。なら取引だ」

首筋にナイフを当てられたような、鋭利で冷たい声。

「っ！？」

弾かれたように照井が横を向くと、翔太郎がソファーに腰掛けたまま影山に拳銃を突きつけていた。

一体いつの間に銃を取り出したのか、照井や影山、離れた所に立っていた桜井でさえ、完全に虚を突かれていた。

「左……？おい左！何をしている！？そんなもの、どうやって手に入れた！！」

「以前に世話してやった暴力団から借りてきた」

夜の海より暗い眼差しを影山に向けたまま、翔太郎が口を開く。

「影山。お前を含むフウト・フードの全社員、八百二十三人の命を見逃してやる。その見返りとして、今すぐ亜樹子をここに連れてこい」

「……話に聞いていた左探偵とは、少し違いますね。ずいぶんと乱

「暴なやり方だ」

「知ったことか」

「私はあなたを過小評価してはいませんが……過大評価もしません。左探偵お一人で、我が社の社員全員を殺すことが出来るとでも？」

笑みを消しつつも、影山は少しも臆した様子がない。

「そうか。なら手始めにお前の頭を吹っ飛ばそう。あの世で残りの八百三十二人が来るかどうか、楽しみに待ってりゃいいさ」

「左、落ち着け……馬鹿な真似はやめろ。そいつを撃ったら、俺はミュージアムの前にお前を逮捕しなくてはなくなる！」

だが照井の言葉など聴こえていないかのように、翔太郎は影山の額に向けて静かに拳銃を構えた。

「……残念です。あまりに軽率、あまりに短絡的。こちらの買いかぶりだったようですね」

影山は本当に残念そうに目を閉じ、

「……なめるなよ、小僧」

ぎょろ、と大きく目を見開くと、彼は右手の裏拳を拳銃に叩きつけた。

銃口が反れた瞬間、もう片方の手でポケットからガイアメモリを取り出し、即座に起動させる。

《ブレード!》

手の平に刻印された生体コネクタにメモリが挿入され、影山の体に『刃の記憶』が呼び起こされた。

第2話 Wの不在／運命の子はあざ笑う

異形の体へと変貌を遂げた影山……ブレード・ドーパントが、ゆっくりと顔を上げる。

『ブレード』のメモリにより金属と化した肉体は至る所に鋭い刃が突き出ており、特に右腕は二メートルを越す大剣に変化していた。

「っ……下がれ、左！」

照井が翔太郎の前に出て、アクセルメモリを構える。

「変……身……！」

《アクセル！》

ドライバーにガイアメモリを差し込み、スロットルを全開にひねると、唸るようなエンジン音が部屋中に響き渡った。

アクセルドライバーから灼熱の炎にも似た赤光が溢れ、彼の体を包み込む。

次の瞬間には、真紅の装甲を身にまとった仮面ライダーアクセルがそこに立っていた。

「オオオオツ……！」

大剣を振りかぶり、迫り来るブレード・ドーパント。

アクセルは手にした銃剣・エンジンブレードを構え、襲いかかるドーパントの斬撃を剣の切っ先で弾き、受け流した。

「照井警視！私に抵抗するということは、人質の命はどうなってもよろしいですね！？」

「黙れ！この状況自体は本意だが……お前たちを逮捕し、亜樹子も救出することに変わりはない！」

「現実味のない理想論を！あなたほど頭脳明晰な方が、なぜそんな男と行動を共にするのです！？」

「俺に……質問をするなああつ！！」

ドーパントの攻撃を剣の側面で受け止め、その反動を利用して後方へと跳躍し、敵との間合いを取る。

アクセルは素早くエンジンブレードの刀身を押し下げると、スロットにメモリを装填した。

《エンジン！》

ギジメモリであるエンジンメモリを触媒に、アクセルメモリの中からエンジンブレードに『内燃機関の記憶』が送り込まれる。

剣先をドーパントに向け、アクセルはグリップのトリガーを引いた。

《ジェット！》

高速で放たれたエネルギーの弾丸が、ブレード・ドーパントに着弾

する。

「ぐうつ！？」

被弾した腹を押さえて呻くドーパント。

その上から、さらに立て続けに二発、三発と光弾を叩き込む。

十発ほど撃ち込んだところで、彼はトリガーから指先を離した。

「……………」

誰の目から見ても明らかな、一方的な展開。

しかし、片膝をついたのはアクセルの方だった。

「……な、に……！？」

痛みの走る胸に手をやると、いつの間にか無数の傷跡がつけられている。

「……その程度ですか？照井警視」

対するブレード・ドーパントは、ダメージを一切感じさせない動きで立ち上がった。

「その様子では、いつ斬られたのかも分かっていないようですね……『ブレード』の真骨頂は、刃物そのものにありません。弾丸をも上回る斬撃の『速度』。それこそが私の最大の武器なのです」

アクセルの目前まで迫り、右腕の大剣を首筋に突きつける。

「あなたの攻撃……悪くはなかったんですがね。この鋼鉄の体を傷つけるには、少々力不足だったようで」

「……その、油断が……貴様の敗因だ!!」

エンジンブレードをドーパントに投げつけ、その隙に何とか立ち上がる。

胸部を中心に激痛が走るが、構わずにアクセルはクラッチレバーを切り、スロットルを全開にした。

《アクセル！マキシマムドライブ！》

アクセルメモリに秘められた力を臨界点まで引き出し、『加速の記憶』を最大出力で発動させる。

「ハアッ!!」

裂帛の気合いと共に、アクセルは眼前のブレード・ドーパントに向けて高出力の回し蹴りを放った。

が……

「その表現は正しくありませんね」

不意に、ドーパントの右腕が消え失せる。

次の瞬間には、攻撃していたはずのアクセルが逆に吹っ飛ばされて

いた。

「が、はっ!？」

知覚出来ないほどのスピードで大剣の連撃を受けたのだと理解した時には、すでに床の上で動けなくなっていた。

「『油断』ではなく『余裕』と表現するのですよ。この場合はね」

「……く、そつ……逃げろ、左！」

「残念ながらそれは許可出来ません。ミュージアムに刃向かった罰として、彼にはここで死んでもらいます。さて……」

翔太郎に向き直り、両手を広げる。

「大変お待たせしました、左探偵。まずはあなたから消してさしあげましょう」

悪意を孕んだ死刑宣告。

しかし当の翔太郎は、片手に持った手帳に視線を落としたまま身構えようとしなかった。

「……?これから死ぬ人間にしては、緊張感のかけらもありませんね。ガイアメモリを持っていないあなたが、まさか生きて帰れるとでも?」

「まあな」

ぱたん、と黒い手帳を閉じ、倒れているアクセルに声をかける。

「立て照井。こいつの倒し方を教える」

それを聞いたブレード・ドーパントは、少しの間きょんとして…
…そしてすぐに大声で笑い出した。

「これはいい！結局は瀕死のお仲間に頼った挙げ句、『倒し方を教える』とききましたか！左探偵、あなたジョークの才能がありますよ！」

翔太郎は嘲りの言葉を無視してアクセルに近づき、しゃがみ込んで小さく耳打ちした。

「……………」

「……………いいだろう。やってやる」

エンジンをブレードを拾い上げ、それを杖にしてアクセルが立ち上がる。

「影山……………お前、俺や照井を過小評価しないつつたな」

「ええ。それが何か？」

にやにやしながら返すドーパントに、肩をすくめてみせる。

「それはお前の勘違いだ」

「……………は？」

《スチーム！》

前方に突きつけられたエンジンブレードから、大量の蒸気が放射される。

「！？」

全てが白一色に染まった視界の中、翔太郎の無機質な声が室内に響いた。

「『ブレード』が持つ斬撃の速度は確かに厄介だ。だが速いのはあくまで斬る速度だけで、高速移動が出来るわけじゃない……大剣の射程距離に入らなければ、なんの問題もねえんだよ」

「何を……っ！？」

声の聴こえる方向に駆け出しながら、高速で剣を振りかぶるブレード・ドーパント。

しかし闇雲に振るう刃は空を切るばかりで、一向に当たる気配がない。

「ちっ……ですが、私にはこの鋼鉄の体がある！あなたたち程度の攻撃では、傷をつけることも不可能だ！！」

絶対の自信が込められた言葉にも、翔太郎の声は微塵も焦りを感じさせなかった。

「その硬化した身体だが……打撃や斬撃には打たれ強くなった反面、

肉体を構成している金属の電気伝導率が高い。つまり」

《エレクトリック！》

「っ！？」

白い煙幕の向こうから飛来する何かを察知し、反射的に右腕の大剣を叩きつける。

刹那、

「あがががつ！？」

体内を駆け巡る衝撃に全身が硬直し、ブレード・ドーパントは身動きが取れなくなった。

「つまり、電撃に対する耐性は極端に低いわけだ」

高圧電流の衝撃から抜け出せずにいるドーパントの大剣には、刃を帯電させたエンジンブレードが深く食い込んでいた。

「ここ、こちらのいい位置は煙幕のせいで見えなかったはずだ。ただだ！？なぜ私のもののある場所が分かったたたんだあ！？」

「いいや？照井はお前の声を頼りに、おおまかな狙いをつけて武器を投げただけだ」

「！？……ま！まままさか！？」

「そういうことだ。お前は自分の射程範囲に飛び込んできた照井の

武器に、自分から当たりに行っちゃったわけさ。反射的に動いた高速の右腕を恨むんだな」

「そんな……馬鹿ななななあー!!」

絶叫するドーパントの眼前に、蒸気の霧を割ってアクセルが姿を現す。

その体は満身創痍ながら、みなぎる気迫はさらに増していた。

「もう逃がさん。今度こそ……振り切るぜ!!」

《アクセル! マキシマムドライブ!》

アクセルメモリのガイアウィスパーが、再び最大出力を告げる。

「やめ、やめろろろおっ!?!」

「うおおおっ!!」

マキシマムドライブによって放たれた回し蹴りがドーパントを捉え、断末魔の叫びごと金属の肉体を完膚無きまでに破壊した。

爆風が全ての窓ガラスをこなごなに砕き、停滞していた蒸気を吹き飛ばす。

「う……あ……」

視界の戻った部屋の中で、人間の姿に戻った影山が脱力したようにがくりと膝をついた。

手の平のコネクタからガイアメモリが排出され、小さく弾けて砕け散る。

「お前は俺らを過小評価してたんだよ。俺や照井のデータを元に自分の実力と比較して、『こいつらなら勝てる』と勝手に思い込んだんだ」

情けも容赦も感じさせない冷徹な瞳で、影山の前に立つ。

「なめるなよ。そんなチンケな計算なんざ、いくらでもぶち破つてやる。お前程度の頭じゃ、俺たちの実力は計れねえよ」

「……悔しいが……おっしゃる通りのようですね……」

生気の抜けた表情で、影山が力なく笑う。

「ガイアメモリを持っていなくても、探偵としてのあなたには注意すべきでした……まさか私のメモリについて、あれほど詳しく調べてあったとは……」

「あらかじめ調べておいたわけじゃない」

胸のポケットから手帳を取り出し、中身を開いてみせる。

「俺がブレードメモリの存在を知ったのは、ついさっきだ」

「……!?!」

影山の顔に不可解の色が浮かんだ。

手帳のページには、ガイアメモリの情報はるか一文字たりとも書き込みがされていない。

完全に白紙の状態だった。

それを見て、変身を解いた照井も訝しげな声を上げる。

「どういうことだ左。なぜ初めて見るメモリの特性と弱点が分かった？」

「……そいつは後で話す。とりあえず、影山をしょっぱいちまえ」

「？ああ」

翔太郎の態度に何か引つかかるものを感じつつも、とりあえず照井は影山の腕を掴み、その手首に手錠をかけた。

「……今のところ、亜樹子はまだ無事なはずだ。まずは必要な情報をそいつと秘書から聞き出して……」

言いかけて、はっと気づく。

「あの女がない」

「何っ？」

照井が振り返り、部屋の中を見回す。

社長室の入り口に控えていたはずの桜井が、いつの間にかいなくな

っていた。

「あいつ……っ！追うぞ左！逃がしては後々面倒なことになる！」

「ああ……！」

と、

『無駄なことはやめたまえ。彼女ならすでにこちらで保護したよ』

二人の会話を遮るように、若い男の音声が社長室に響いた。

聞き覚えのあるその声に、二人……特に翔太郎が、びっくりと動きを止める。

『戦いの最中だったとはいえ、敵と分かっている人物から注意を逸らすなんて君らしくもないね？照井竜』

「この声……まさか!？」

「……そこか」

音声が聴こえてくる場所に気づき、翔太郎がデスクの上のノートパソコンを乱暴に開く。

ディスプレイに映し出されたのは、研究室のような部屋の映像だった。

パソコンを始めとする様々な機器が薄暗い室内を照らし、部屋の主の姿をぼんやりと浮かび上がらせている。

『やあ。久しぶりだね翔太郎。前回会ったのは二ヶ月前かな?』

「……ああ」

湧き上がる感情を必死で抑えながら、そっけなく応える。

画面越しに見る青年の姿は、最後に会った時と何も変わっていないかった。

寝ぐせそのままの黒髪に、シルク地の白いパジャマ。

前髪の隙間から覗く虚ろな眼差しは、自らの好奇心を満たさんとする暗い欲望がにじみ出ているかのようだった。

地球の全てを背負わされた『運命の子』にして、かつて翔太郎の相棒でもあった、その男の名は。

「……フィリップ!」

翔太郎の横からディスプレイを覗き込んだ照井が、驚愕に目を見開いた。

『そのニックネームで呼ばれたのは久しぶりだよ。でも、その呼び名はあまり好きじゃないんだ。今度からはちゃんと本名で呼んでくれないか』

「何?」

「らっ……来人君!」

手錠に拘束されたまま、影山がノートパソコンのディスプレイに身を乗り出す。

「面目ない……！彼らの力を侮っていました。申し訳ありませんが、すぐに増援を……」

『影山大輔』

つまらないものを見るような目つきで、青年が影山に告げる。

『僕は君に、照井竜と戦うことになったら桜井里奈を使え、と言っただよ。彼女の持つメモリは、アクセルを無力化させるという点においては最強なんだ』

「！そ、それは……」

『自分の力を過信した結果がこれだ。諦めるんだね。もう君に興味はない』

「まっ……待つて！待つてください、違うんだ！もう一度、もう一度だけチャンス……！」

さすがのようにして必死に言い募る影山を無視して、青年……園咲来人が翔太郎の方に向き直った。

『すまない、邪魔が入ったね。実は君たちをおびき出すように指示したのは僕なんだ』

「はっ……お前もヤキが回ったな。あの程度の脅しで俺たちを従え

られると、本気で思ったのか？だったら」

『ヒューマノイドガイア』

「……………ああ？」

突然聞き慣れない言葉を突きつけられ、翔太郎が怪訝な声を上げる。

『僕が最近ハマっている研究のテーマさ。今現在、我々が地球の記憶を行使するにはメモリによってドーパントに超人化する必要がある。……………だが』

にたり、と来人が笑みを深めた。

『人体そのものをガイアメモリに見立てて、地球と直結させる。これにより、この星の力をダイレクトに引き出せる新たな人類に進化させることが出来るんだ』

「……………！？」

絶句する照井と翔太郎に構わず、彼は後を続ける。

『インターネットなど比べ物にならない、地球の本棚ほしのほんだなという検索・通信手段を駆使し、ありとあらゆる記憶の力を扱える生命体！……………この世界に生きる全ての人間が、人の形をした小型の地球になるわけさ……………！』

「……………イカれたお前にピッタリの、馬鹿げた研究だな」

嫌悪感を剥き出しにして、翔太郎が吐き捨てた。

来人は気分を害した様子もなく、にやにやしなから肩をすくめる。

『そう言っなよ。その馬鹿げた研究の被験者二号と三号が、君たちなんだから』

「何？」

『本当は今日中に確保しておきたかったんだが……まあいいさ。被験者一号の実験が終わったら、また連絡するよ』

「……っ！？待てフィリップ！」

翔太郎を押しつけて、照井が叫ぶ。

「被験者一号、だと……お前まさか！？」

『君の想像通りだよ。翔太郎も、もう気づいているんだろう？……アキちゃんさ』

「フィリップ貴様あー！！」

絶叫する照井からノートパソコンを取り上げ、翔太郎が告げる。

「亜樹子は必ず連れ戻す。それとこれは前回も言ったことだが……もう一度言っておくぞ」

パソコンを閉じ、床に放り投げる。

「園咲来人……てめえは必ず俺が殺す。首洗って待ってろ」

『ああ。楽しみにしているよ』

その声ごとノートパソコンを踏み潰し、翔太郎は照井に向き直った。

「行くぞ照井。早いとこ亜樹子を助けねえと、取り返しのつかないことになる」

「待て！聞きたいことは山ほどあるが……どうやって居場所を突き止める気だ！？」

「問題ねえよ。必要なもんは揃った」

そう言うのと翔太郎は目を閉じ、深呼吸でもするかのように両腕をわずかに広げた。

「知りたい項目は『亜樹子の居場所』。キーワードは、『照井亜樹子』・『ヒューマノイドガイア』・『被験者一号』の三つ」

言葉と共に彼の精神が分離され、とある場所に接続される。

「……！？左、まさかそれは……」

その現象をよく知る照井は、予想だになかったことに息を呑んだ。

そして、果てなく続く白一色で統一された空間の中。

目を開いた翔太郎が、宣言するようにつぶやいた。

「検索を始める」

第3話 抗えないB / 加速VS減速

街の観光名所として名高い、風都博物館。

かつては日本有数の収蔵品を展示する人気スポットだったが、とある事情により経営者が不在となり、現在は一時的に閉館状態となっている。

(……何度来ても好きになれないわね……この陰気臭い雰囲気は)

客が来なくなって久しい館内。

布が被せられた数々の展示品を横目で見やりながら、桜井が胸中で嘆息する。

黒スーツの男に先導されてたどり着いたのは、地下一階の最奥、マジックで『立入禁止』と走り書きされた紙が貼られている部屋だった。

「失礼致します。桜井です」

軽くノックしてから声をかけるが、扉の向こう側からはパソコンを操作する音がわずかに聴こえるだけで、一向に返事が返ってくる様子がない。

少しだけ躊躇してからドアを開けて、部屋の中に歩を進める。

機材で埋め尽くされた薄暗い室内。

弱々しく明滅するコンピュータの群れの中を見回し、ほどなく自分を呼び出した人物を発見した。

「お仕事中恐れ入ります。園咲様」

「やあ、早かったね」

フロアに座り込み、三台のパソコンに向かって同時にキーボードを叩きながら、来人が返事をする。

彼の周囲にはハンバーガーやフライドポテトが盛られた皿がいくつも置かれており、時折それらをほおぼっては口の周りをべたべたに汚していた。

「影山はあの後、照井氏によって風都警察署に連行されました。既にマスコミ等への対応は済ませてあります」

「想定の範囲内さ。君が無事なら、今回の実験には何の支障も出ない」

指先についたケチャップをぺろりと舐め取り、来人が笑う。

「それより、今は翔太郎と照井竜だ。僕の予測が正しければ、あの二人はおよそ三時間後にはここに辿り着く。今度は君にも戦ってもらうよ、桜井里奈」

パジャマの袖で口の周りをぬぐい、彼は立ち上がった。

「翔太郎に預けていたものも……そろそろ返してもらわないとね」

博物館の正門を囲む、数台のパトカー。

周囲には『KEEP OUT 立入禁止』と印字された黄色いテープが貼られ、付近の住民が遠巻きに様子をうかがっている。

慌ただししい雰囲気の中、翔太郎は一台のパトカーに背を預けながら、無言で風都博物館を睨み据えていた。

と、

「よつ。翔太郎」

聞き慣れた声に振り向けば、ツボ圧し器を肩からぶら下げた中年の刑事がこちらに近づいてくるところだった。

「……お久しぶりつす、ジンさん」

「物騒なツラあしやがつて。ちつと見ねえ間に随分と暗い野郎になつちまつたじゃねえか？ん？」

刃野は苦笑しながら翔太郎の肩を叩き、隣にいた照井に敬礼する。

「課長、全員配置に着きました」

「ご苦労だった。予定通り、まずは俺と左で館内の様子を探つてくる。組織の人間がどの程度いるのかは不明だが、もし敷地内から逃走しようとする人間がいたら、一人残らず取り押さえろ」

「了解しました。じゃあな翔太郎。あんま無茶すんじゃないぞ?」

自分の持ち場に戻っていく刃野の背中を見送りながら、照井が呟いた。

「……フィリップが、半年前に死んでいたとはな」

先ほど翔太郎に聞いた内容を噛みしめるように、強く目をつぶる。

「今ミュージアムにいるのは、ファンゲメモリを直挿した影響で別人になっちまった『園咲来人』だ。フィリップの人格はもう、ない……その証拠に、あいつは地球の本棚には入れねえらしい」

「何かないのか? 奴を元に戻す方法は」

「ねえよ。地球の情報で構成されてるあいつの体に、牙の記憶が絡まって融合しちまったんだ。元に戻れないのは、フィリップ本人が一番よく分かってた」

「……っ、何故だ!」

こらえきれなくなった照井が、翔太郎の胸ぐらを掴む。

「何故俺にこのことを黙っていた!? 俺たちは、仲間じゃなかったのか!」

「……………」

激昂する照井。

翔太郎は彼から目を逸らしたまま、ぽつりと呟いた。

「……怖かったんだよ、俺は」

「何っ？」

「フィリップが消えて、亜樹子も行方不明だ。俺は何も出来ないまま、家族を二人もなくししまった。これ以上、誰かが俺の前から去っていくのを見たく無かったんだ」

「！……馬鹿め……っ」

やりきれない、といった声で照井が吐き捨て、翔太郎から手を離す。

彼は何も言わずに博物館の正門に向かって歩き出し……そして、背を向けたまま告げた。

「……亜樹子は元より、俺は君たちのことも信じ合える仲間だと思っている。全て一人で背負いこもうとするな」

「……すまねえ」

小さく謝罪を口にし、翔太郎も後に続いて敷地内に入った。

閉館した博物館の建物は寂れた雰囲気醸し出しているが、よく見れば人が出入りしている形跡がいくつもある。

と、照井が不意に立ち止まり、

「中に入る前に……左、拳銃を渡せ。警察として、そんなものを所

持しているのは見過ごせん」

「あ？……ああ、コイツか」

翔太郎は懷から黒光りする拳銃を取り出し……やおら銃口を照井に向けると、なんのためらいもなく引き金を引いた。

「！」

照井の表情がわずかに強張る。

が、

『ぽふっ』という気の抜ける音と共に銃口から飛び出たのは、安っぽい造花だった。

「サントちゃんくれたオモチャだよ。ブラフに使えんじゃねえか
と思って持ってきたんだ」

「……見た目は妙にリアルだな。本物と見分けがつかなかった」

呆れたように嘆息する照井。

「だが中にいるのは、脅しなど通用しない相手だぞ。オモチャ一つでは心許ないんじゃないか？」

「こんなもんを切り札にするつもりはねえさ」

銃をしまいながら、翔太郎は言い放った。

「俺自身が、ジョーカーだからな」

非常灯のみが足下を照らす、暗闇に包まれた館内。

布を被った展示物と相まって、博物館というよりお化け屋敷のような印象を受ける。

この博物館にはあまりいい思い出がない翔太郎は、無意識の内に表情が険しくなっていた。

（……園咲琉兵衛と初めて会ったのも、この博物館だったな）

ミュージアムの創始者にしてフィリップの父親だった男の顔を思い出し、眉間にしわを寄せる。

（……本当にあいつを殺せるのか？俺は）

相棒を救う方法が、何かあるのではないか。

なかったとしても、殺す必要はないんじゃないか。

しかしそんな葛藤を押しつけるように、翔太郎の頭の中にフィリップの最期の言葉が響いた。

『……僕が本物の悪魔になってしまっ前に、僕を殺してくれ』

『風都を、僕が好きだったこの街を、僕の手から守ってくれ』

頼んだよ、翔太郎。

そう言い残してフィリップの意識は途絶えた。

数ヶ月後、翔太郎がガイアメモリ絡みの事件を捜査していた時。

偶然再会したフィリップ……否、園咲来人は、笑顔で翔太郎を殺そうとした。

いわく、何らかの要因で翔太郎に移った地球の本棚の能力を、彼を葬ることで取り戻せると考えているらしい。

（俺自身、なんで地球の本棚に入れるようになったのか……分かってねえってのによ）

照井に気取られぬよう、静かに嘆息した……次の瞬間。

突如館内に銃声が轟き、二人の足下に着弾、激しい火花を散らせた。

「何っ!？」

翔太郎と照井が身構えるのと同時に全ての照明が点灯し、暗かったフロアを明るく照らす。

光量の変化に眩みかけた目を凝らして正面を見やると、非常口の扉の前に五人の人影が現れていた。

一人は青いスーツに身を包んだ桜井里奈。

さらに、こちらに向けて拳銃を構えている、黒服のミュージアム構

成員が三人。

そして、彼らを従えるように中心に立っているのは。

「ミュージアムへようこそ、翔太郎。そして照井竜」

暗く濁った虚ろな瞳で、来人は微笑みを浮かべた。

「園咲……」

何かを言い返そうとした翔太郎を制して、照井が一步前出る。

「フィリップ。いや……園咲だったな。亜樹子はどこにいる」

「安心したまえ。すぐに会わせてあげるよ。……始めよう、桜井里奈」

「かしこまりました」

涼しげな笑みを浮かべた桜井が、おもむろに右手を掲げる。

その手には、『Q』と刻印されたマゼンダカラーのガイアメモリが握られていた。

《クイーン！》

ガイアウィスパーが鳴り響き、彼女のうなじに刻まれた生体コネクタにメモリが挿入される。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7613p/>

仮面ライダーW外伝 “ The Long Goodbye ”

2011年11月16日07時01分発行